



第47回九州シニア選手権競技

競技報告 (2017/ 9/ 27-28)

写真と記事 : M. Kikutake

通算6オーバー、150

小宮 正 (小倉) が 逆転で初優勝!

選手権は9月27、28日の2日間、長崎県雲仙市の愛野カントリー倶楽部(6646坪、パー72)で行われ、通算6オーバー、150で回った58歳の小宮正(小倉)が後続に1打差をつけて初優勝した。

競技には55歳以上の140人(欠場15人)が出場。27日の初日は激しい雨の中でのラウンドになり、雨脚が強くなった午後一時、コースコンディションの悪化のため59分間の中断があった。午後3時前には雨も上がったが、競技はべた遅れで、日没と競争しながらのホールアウトだった。



雨、風の中での激しい戦い



そんな厳しい条件で初日、アンダーパーをマークした選手はなく、2オーバーの74で68歳の村川米蔵(八代)と65歳、山浦正継(志摩シーサイド)の2人がトップに並んだ。山浦は2008年大会の優勝者。1打差の3位タイには2014年大会優勝の大野徹二(大博多、60歳)と田中宏之(西日本、57歳)の2人がつけたほか、4打差の78までには15人がひしめき、混戦模様となった。この日で予選が終わり、14オーバー、86の77位タイまでの83人が最終日に進出。前回優勝の長野清一(ザ・クラシック、56歳)は89を叩いて予選落ちしたが、日本シニアは昨年5位タイでシード権がある。

最終日は雨は上がったものの、風が出てスコアは伸びない。その間隙を縫うようにして浮上してきたのが小宮だった。首位に4打差、11位タイのスタートだった小宮は前半1バーディー、2ボギーで折り返すと、後半は2バーディー、1ボギーで回り、ベストスコアタイのイーブンパー、72をマークして逆転で初の栄冠をつかみ取った。

1打差の7オーバー、2位タイは野上泰生(小倉、57歳)と大野の2人。さらに1打差の4位タイにはベストスコアタイの72で回った平川勝也(白杵、55歳)と境勉(喜々津、58歳)、山浦の3人。さらに1打差、9オーバーの7位に田中だった。初日首位タイ発進だった村川は通算10オーバーで8位タイ。

(写真は2位タイの野上泰生Ⓜと大野徹二Ⓜ)



第39回日本シニア選手権（10月25～27日・日光CC）は20人が出場権

この試合の結果、第39回日本シニア選手権（10月25～27日・栃木県・日光CC）は11オーバー、12位タイまでの17人と、18位タイの5人中、最終日スコア上位の3人の計20人が出場権を獲得した。



「予選通れば…」が戴冠

初の日本シニア挑戦へ “無欲の勝利、のレフティ、小宮正

初日の豪雨の中のラウンド。前半に2バーディーを奪ったものの、特に後半はボギーの山を築き、トータルで8ボギーの78。「叩いてしまった」の思いもあったが、結果は11位タイ。小宮はねじを巻きなおした。「予選を通れば、と思っていた」選手権だったが、初日の成績で、「粘って上位20人に入ってジャパンに行ければ」と思い直し、なんと、優勝をかっさらったのだ。

自身初の九州タイトル。それを決めたのは最終18番の8筋のバーディーパットだった。



首位に4打差のスタートだった

が、前半1バーディー、2ボギーの37で回り、その差を2打縮めた。後半も17番までに1バーディー、1ボギー。そして、最終ホールでのバーディー奪取だった。ピン手前に乗せ、やや下りのライン。17番までの安定したゴルフで「もう大丈夫だろう、と楽に打ったら入った」と笑った小宮だ。上がってみたら、その楽な1打が勝敗を分けていた。

これまではそう目立った存在ではなかった。しかし、話を聞いてみると、相当の実力者だった。今年は所属する小倉CCの4大タイトル（理事長杯、キャプテン杯、初代理事長杯、クラブ選手権）を独占する年間グランドスラムを達成。50年を超す歴史の同CCで初めての快挙という。

長崎県対馬・佐護の出身。高校卒業後、北九州の魚市場に勤めた。スポーツは柔道や軟式野球をやっていて、かっちりとした体形。そんな体を見て「飛びそう」と会社の先輩に勧められてクラブを握ったのが始まりだった。以来、35年のゴルフ歴。競技に出始めたのは「45歳ぐらいから」と奥手で、シニア選手権も出場資格を得た55歳から毎年、挑戦してきたが、2015年の41位タイが最高位だった。

「私のゴルフは我流」とはいうものの、週2回のラウンドと、2日に1回の練習を続け、取り組む姿勢は熱心。加えて、「あきらめない粘りのゴルフ」が持ち味だ。初めての日本選手権挑戦には「九州のみんなに負けないように」と控えめの抱負だったが、持ち前の粘り腰で優勝戦線をかき混ぜてほしいものだ。

